

## 総括研究報告書

1. 研究開発課題名：インフルエンザ様疾患罹患時の異常行動に関する研究
2. 研究開発代表者：岡部信彦（川崎市健康安全研究所）
3. 研究開発の成果

インフルエンザ様疾患罹患時に見られる異常な行動についての実態把握の必要があり、2014/2015 シーズンにおいて調査を行った。重度の異常な行動に関する調査(重度調査)はすべての医療機関においての調査を依頼した。軽度調査は、インフルエンザ定点医療機関のみに依頼した。報告方法はインターネット又は FAX とした。また、重度異常行動の発症率と服用したノイラミニダーゼ阻害剤の種類との関連について、レセプト情報・特定健診等データベースでのデータを用いて検討を行った。重度の異常な行動および軽度の異常な行動の発生状況について、従来同様にインフルエンザ罹患患者における報告と概ね類似していた。また、重度異常行動の発症率と服用したノイラミニダーゼ阻害剤の種類との関連について、最も重度な異常行動においては 0-9 歳と 0-19 歳でペラミビル使用例での発症率が他の薬剤より有意に高かった。また、10-19 歳ではザナミビル、ラニナミビル使用例に比べて服用なしの場合の発症率が有意に高かった。報告内容には飛び降りなど、結果として重大な事案が発生しかねない報告もあったことから、引き続きの対応が必要であると考えられた。また、ノイラミニダーゼ阻害剤間で有意に発症率が低いことがその薬剤の安全性を意味するものではなく、有意に発症率が低いノイラミニダーゼ阻害剤、あるいは服用のない場合においても重度異常行動は報告されているため、ノイラミニダーゼ阻害剤の種類、服用の有無によらず、注意が必要であると考えられた。